

コートジボワール，セネガル

調査行

旅をして何が見えたか

佐藤 章

アビジャンに降り立つ

暑いと感じる間もなく身体が弱っていく。そんな暑さである。1994年11月7日，入道雲がぼんぼん浮かぶ晴れた空の下，ウフェ-ボワニ国際空港に降り立った。空港からアビジャン市街に向かって一直線に伸びる道路の両側では褐色の牛の群れが草を食んでいて，その向こうの地平線には熱帯林が広がる。迎えにきてくれたおんぼろのブジョーで15分も走るとアビジャンの中心街プラトーである。10数階建てのビルが立ち並ぶ通りにはたくさんの人がひしめいている。スーツやらパーニユやら綺麗な格好をしたひとがおり，そして垢まみれの服を着たもの売りがいる。もの売りは剃刀や乾電池や新聞を両手にいっぱい持って道行く人に声をかけている。通りのあちらこちらでオレンジやココヤシを並べた屋台が立ち，ガラス張りの瀟洒なビルの前のコンクリート敷きの歩道をトカゲがするするとはい回っている。

ホテルの部屋から外を見渡して，空気が澄んでいることに気がつき驚く。夕方になると黒い雲がギニア湾の方から湧き起こってきて雷を鳴らし，激しい雨を降らせる。空調の効いた部屋を出て，なにやらムード音楽が流れるフロントでお仕着せを着たフロント係にキーを渡して外に出ると，昼間通りに充満していたすえたような臭いは雨に流

されてしまったか，少々蒸し暑いがほっとひと息つく感じである。水銀灯のともる通りの夜空にはコウモリの大群が飛び回っている。

アビジャンを歩く

「旧仏領西アフリカ諸国における人口移動と都市化」というテーマで組んだ今回の現地調査の目的は，コートジボワール最大の都市アビジャンと同国内陸部の諸都市および農村部，セネガルのダカールを訪問し，都市化の状況を観察し資料収集を行なうことにあった。その手始めに滞在したアビジャンでは大学や研究機関での調査が主たる課題であった。しかしその調査から得られるものにも増して，なによりもわたしの関心を引いたのは生活のなかで出会う見聞そのものであった。

自動ロックの扉を三つ通り抜けなければ入室できないオフィスをたずねて，政府統計の出版状況について調べた後，炎天下ぶらぶらと2ブロックもいくとマルシェ（市場）があって，有機物の異臭が立ちこめ，出店の間は人いきれである。フロントガラスやヘッドライトのない薄汚れた車がよたよたひしめいている通りを，一団のベンツが青いランプを灯しサイレンをならしながら走り抜けていった。

マルシェ周辺の往来には，バカ（小型乗合バス）

やオロオロ(白タク)が集まってきていて、目的地を叫んだりクラクションを鳴らしたりして客を拾っている。アジャメやトレッシュヴィルといった近郊の名が叫ばれている。夕刻ともなればどのバカも満員である。時折走りすぎるソトラ(バス公社)のバスも乗客を満載している。週末にはプラトーはまったく人通りがなくなってしまう。平日にひしめいている人々はみな近郊から、バカやバスを使って通ってきているのだろう。

ある日、購入した資料を段ボール箱に詰めて郵便局に持ち込むと、そんなでかいのはここでは受け付けない、あっちの事務所に行けと断られる。「あっちの事務所」がみつからないでうろうろしていると、道ばたにたむろしていた薄汚れたTシャツを着た子供がひとり寄ってきて、おれが案内するといって15キロの箱をひょいと頭にかつぐ。おまえ場所わかるのかと聞くとまかせておけと言うのだが、実際には何度も道を訪ねている。結局暑い中ひどく遠回りして目的地にたどり着いた。不機嫌な私はおなさけ程度のチップしかやらなかった。子供は「ダンナ、少ないよ」と文句を言ったが私は聞く耳を持たなかった。プラトーの通りを歩くと似たような子供たちがいつも声をかけてきた。しかしこの子らも週末には姿を消してしまう。

向こうで知り合ったイボワリアンN氏の誘いで、彼の友人たちと一緒にバッサムの浜辺に行く機会があった。N氏はパウレ(コートジボワール中央部の部族)で、友人も皆パウレである。集まった12人の男たちは年のころは30から40で、皆アビジャンで定職についている。よく週末にこうやって集まっては、車を連ねてあちこち出かけるらしい。アビジャンから西に向かって浜沿いの道路を走る。道路沿いに延々と続くヤシの防風林の一隅に目指す小さな集落があった。車のトランクに押し込ん

でこられた仔ヤギは、その場で締められヤシの葉の焚火で毛を焼き取られた後、解体されてシチューの具にされてしまった。ハエがわんわんたかるシチュー鍋を囲んでの会食で、日本語とパウレ語が似ているという話題がのぼった。「パウレ語で『2』はニョンで日本語ではニだろ。『100』はパウレ語じゃヤークン、日本語ではヒャク。似てるじゃないか」。苦笑しつつ聞いていると、さらにひとりがこう言った。「パウレはコートジボワールのなかで一番偉いんだ。パウレはイボワリアンのなかの日本人、イボワリアンのなかの白人だ!」。

コートジボワール国立大学講師のB氏宅に招かれたときも同じことが話題にのぼったのには驚いた。氏の部族はアキエであるが、アキエ語はパウレ語と同じくアカン系の言語である。経済学を専攻している氏は、アキエ語と日本語がこんなに似ているという実例をいくつか挙げた後でこう言った。「日本にとっても興味がある。伝統文化を失わずにあれだけの経済発展を遂げた国、日本……きっとアフリカにとって大きな教訓を与えてくれるだろう……」。

その日その日に体験した事柄を、思いつくままに日誌に書きつけながら、わたしはアビジャンという都市について具体的なイメージを結べないことにいらだちを覚えていた。調査テーマである「都市化と人口移動」に関係のない事柄はひとつもないのだ。100年前にはほんの小さな村でしかなかった。毎日わたしが見ているものは一世紀前には存在しなかった。やがてビルが建ち、道路が敷かれ、車が走るようになる。政府が据えられ、新聞が売られ、ラジオ、テレビが放送を始める。国内外から人々が流入し、生き、働き、子をなし、人口が爆発的に増えていく。もの売り、マルシェ、レストランのボーイ、路上にたむろする子供、近郊に密集する住宅、都市においてのみ提供される職に

ついているパウレの友人たち、そして大学教員。脈絡なく蓄積されていくこれらの見聞のすべてが、「都市の歴史と現状」という言葉の下に収斂していくのだということがわたしには信じがたかった。もしそうなのだとすれば、「都市」であれ「都市的」であれ、何か意味のある概念たりえるのだろうかかと、疑問を感じたのである。

全貌のあまりの大きさととらえどころのなさに、わたしは「アビジャン」という言葉さえ使えないような気がした。ここを訪ねる前に持っていた知識、たとえば「アビジャンは人口200万の都市である」と言ってみたとこで、それはいま自分がみている都市の姿のなほどこかを表現し得ているのだろうか。心許ない思いがした。

内陸部を走る

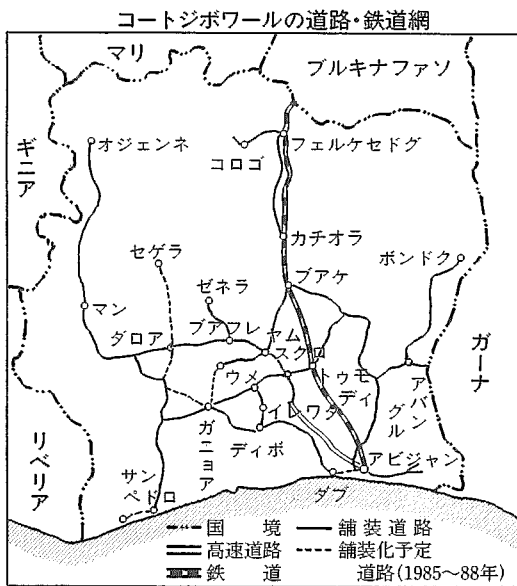
半乾燥地帯の原野を貫く道路を北上して訪れた地方都市カチオラでは、樹齢数十年におよぼうと

いう野太いマンゴーの並木が鬱蒼とした影を落とす通りがあった。役場や警察署はこの通りにある。おそらくこの通りはフランス統治下で拓かれ、現在の役場にはかつてフランス植民地行政府の出張所がおかれていたものと思われる。通りの名前は「平和通り」という。この通りはまっすぐに鉄道の駅に通じている。アビジャンからブルキナファソの首都ワガドゥグに向けた鉄道の敷設は1955年に完了するが、カチオラには30年代には達している。週に3本しか列車が停車しないホームから線路に降りて、アビジャンの方とワガドゥグの方とそれぞれ眺めやり、過去60年間この線路の上をどれだけの人間が移動して行ったのかと思う。

トゥモディからウメ、イレーワタを經由してディボに向かう道すがら、木材を積んだトレーラーとすれ違い、人と荷物を満載したバスを追い越す。沿道の両側にはコーヒー畑が広がる。南部の熱帯林地帯は植民地化開始時には人口がまばらだった地域である。ここにコーヒー、ココアの畑が拓かれ、道路が開通し、その道路の上を人と物と金の流れ、行政網すなわち権力機構が張りめぐらされていったプロセスを想った。その過程には、鉄道と道路というインフラ整備事業に動員された多数のアフリカ人がいた。そして祖父や父が作った道路の上を通って、子や孫が都市へと出かけていき、新たな物や情報を持ち帰っては地元の社会構造を少しずつ変容させていった。いくつもの個人史の集積の果てに現在のコートジボワールがあるのだ。

ダカール

続いて訪れたダカールは穏やかな街であった。日差しは強いが湿気はそれほどでもないためアビジャンよりはすごしやすい。朝夕は涼しく感じるほどである。通りもなんとなくこぎれいで、アビジャンで慣れ親しんだ有機物の臭いはあまり感じ



(出所) 原口武彦「コート・ジボワールの道路建設整備3カ年計画」(『アフリカレポート』No.3 1986年) 27ページ(一部修正)。

られない。からりと晴れた空には、夕方になるとおびただしい数のツバメとトビが乱舞する。ラジオをつけると、リンガラ、レゲエ、ズークー辺倒だったアビジャンとは違って、朗々と歌う哀愁を帯びた曲が多い。

ダカールの通りで出会う人たちは、アビジャンとは人当たりが違った。通りを歩いているといろいろな人が声をかけてくる。ここまではアビジャンと同じだが、話しかけ方が違う。「ヘイ日本人！おまえはカナガワの人間じゃないか？ おれにはカナガワの友だちがいるんだ」とか「ヘイ日本人！日本のNGOに興味があるんだ。話をしよう」とか、なにやら「言葉巧み」という表現がびったりくる調子である。アビジャンではもっと直截に「5フランくれ」とか「おれ何も食べてないんだ」といった感じであった。

セネガル歴史博物館を見学するためフェリーでゴレ島に渡った。ダカールの沖合いに浮かぶ小島であるが、アフリカのなかでは最も早い時期からヨーロッパ人との接触があったところであり、かつては奴隷貿易の拠点の一つであった。棧橋を過ぎるとすぐ島内の案内図があった。そこではガイドたちが待ちかまえていて次々案内役をかってでてくる。こちらは無視を決め込んで、黙って案内板を眺めていると、横にやってきたガイドがにやりと笑って図上の一点を指さし、こう言った。「奴隷博物館はここですよ」。奴隷貿易が盛んであった頃、大陸から送られてきた黒人たちを奴隷として「輸出」するまでの間収容しておくために使われていた館が、現在も残されて、見学に供されているのである。

かつての暗い歴史を観光資源として、それで食べているにやりと笑った青年。そして、路上での言葉巧みな呼びかけ。ほんのわずかな例ではあるが、「すれている」という印象を抱いた。これはい

ったいどういうことなのか。ヨーロッパとくにフランスとの接触の歴史の長さが背景にあるのかと漠然と思う。

ダカール市街の中心に位置する「独立広場」を毎日行き来するたびに巨大な大理石の碑板があることには気がついていなかった。その名の通り独立を記念する内容だと思っていた。ダカールを立つ前日、見納めにゆっくり眺めて見ると、そこに彫られていたのは独立を記念する銘ではなく、第一次大戦と第二次大戦の年号と、数語の鎮魂句であった。この両大戦中セネガルからはとくに狙撃兵として多くの兵士が徴用され、フランス軍に組織されヨーロッパ戦線、インドシナ戦線に派遣されたのである。再び「歴史」という言葉が口をついてでてくる。コートジボワールで、そしてセネガルで、「いま、ここ」で目に見えている社会の「行間」に厚みのある歴史がかいまみえた。

帰りついて

日本に帰りついて電車にゆられながら窓外の風景をぼんやりながめ、これが日本かと思わずひとりごちた。小春日和の空の下、電柱があって、車が走っていて、犬の散歩をする人の姿が見える。これが日本の風景であることは確かなのだ。しかしそれは日本のすべてではない。では、わたしが見てきたものは何だったのだろうか。

アビジャンを訪ね、ダカールを訪ねて、わたしが見たものはほんの現実の一端だけであった。自分の目で見られなかったことと、自分が見たものの背後に潜む歴史という全体像に思いを致すと、その巨大さに圧倒される。しかしわたしにとっての出発点がそこにしかないことも確かなのである。

(さとう・あきら/アフリカ総合研究プロジェクト・チーム)